吳服綱目

年代考

庚戌新春

柳亭種彦翁門人 仙果作

豐國画

鄰林堂壽梓

へ13
3840
1

淺野氏

へ13
3840
1

柳亭仙果六編上

足利絹手染紫六編序

藤末葉ハ長くもなくて若菜ハいろ摘書てもなほ長井が風合ハ大方刀
抜ちゝ丈もなくてつぞろ省畧徒ちゝ高ぬ意猫の爪を切て駆出させてを
やのかたゝ人あれどもすこし其程とゞ色も賞ぶ清逸の筆ハ高ぬあら
ぬ樹霞の袖ゆ引ふ日の野色の小松原未くまぐい遠ゆ甚徒
成解ふ紅沸緑あゝ紀学で及ぶ大場も古熟像ふくのもこ
師匠の由縁是が實の面影と御見捨あく御覧の程只管願ふと
ゆゝ事計肩籠ゆる雅枝少ゝ切ゝく序ハ出んど短く記せ

嘉永三年庚戌正月 吉祥日

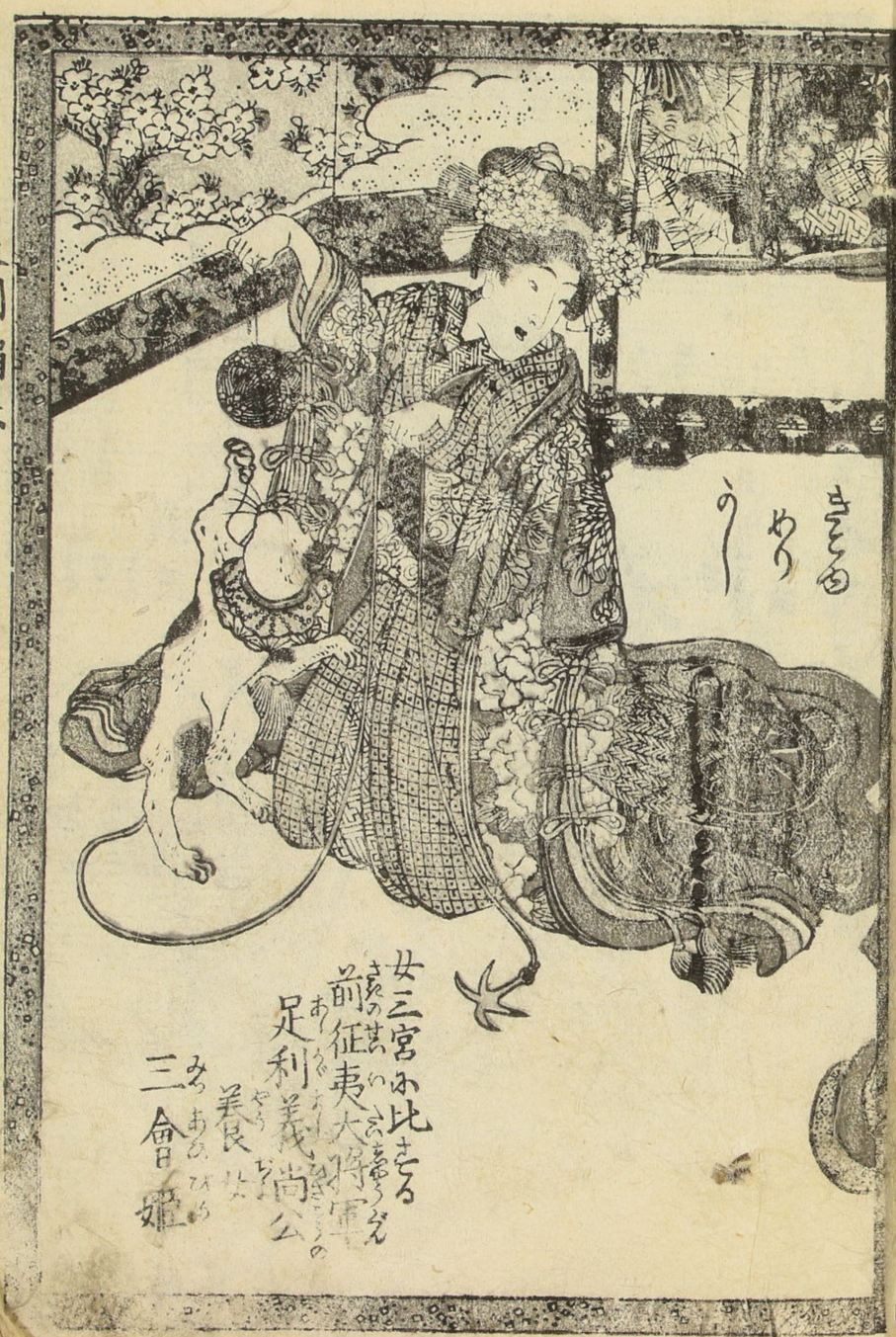
柳亭門人 竹立亭仙果

淨書 玄魚

昔人のんたひ〜ろゆく
よくのゆるさるやうき紙の
ことをハ思ひおろぬわと
をひとうけん
いまの世
ゆへ

さくく〜く
ちろめいき
ともふのうし
ゆまく

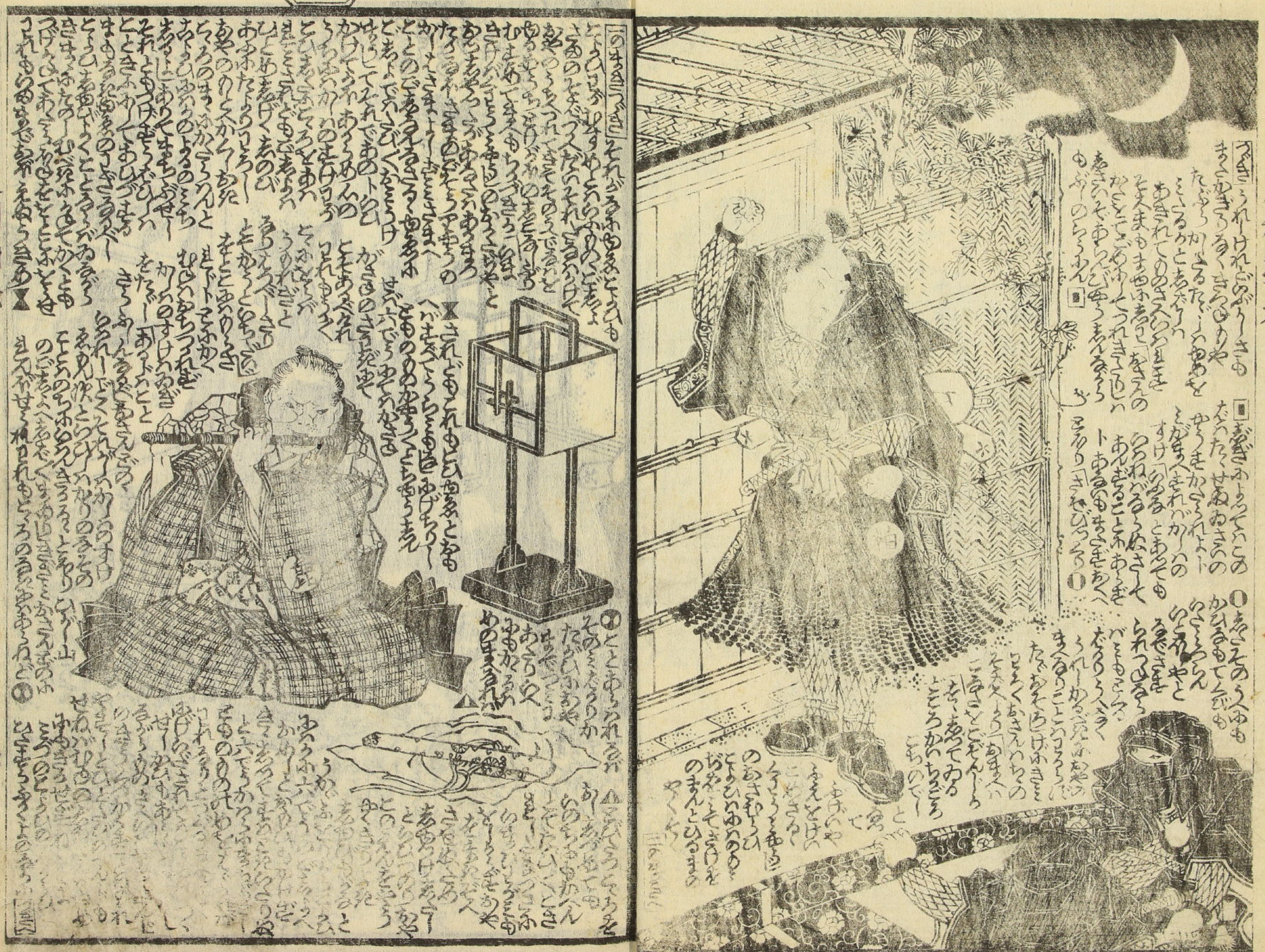
三會姫のめしつき
中里



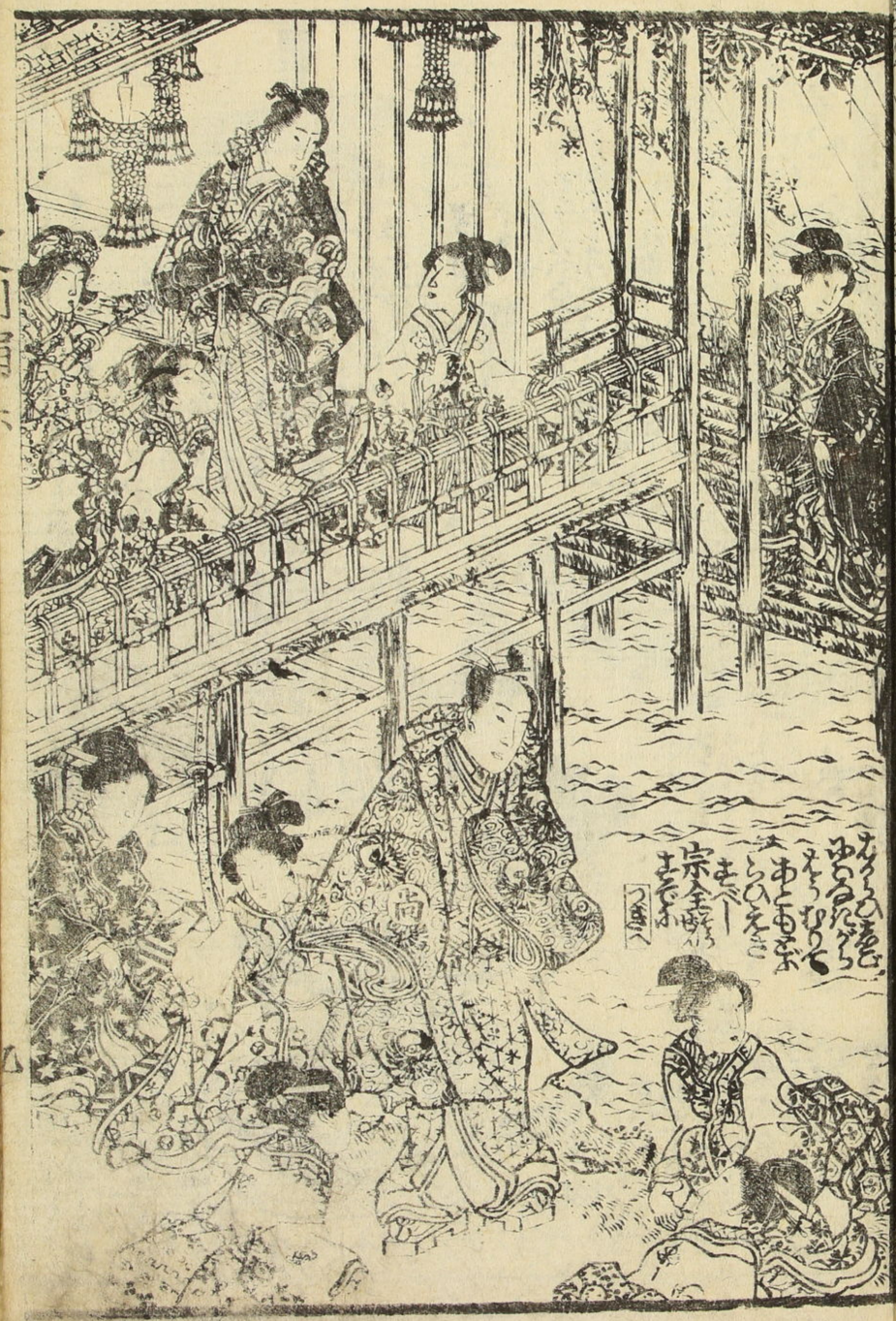
きるのり
う

女三宮ハ比さる
さのきの
前征夷大将軍
あしかゝ
足利義尚公
よしたね
義尚
みあひの
三會姫

大喬木澁右衛門女
於三
新葉集
恋中納言
義欲後とふ
ことを



つるさと
左より
さうびたせんようのいめされトりこれたそれ
まいまくこそれはそれ
ようこもあしとものの
らのぼをさんにすてと
るなりのふたなりもも
ようこぶゆめちどてろ
とようびいたけまいうち
うまづたしえうふ
さうびたせんようのいめされトりこれたそれ
まいまくこそれはそれ
ようこもあしとものの
らのぼをさんにすてと
るなりのふたなりもも
ようこぶゆめちどてろ
とようびいたけまいうち
うまづたしえうふ
右へ
名とつまこの
ひふこちらり
しいそとよま
ごのきまろも
りまりぎまろぎ
まびそのごふ
りろりつぶぶ
まにまろめて
わすりあをあろさね
ゆろるこにまろまも
ゆあわろざるかとろ
だそもまろろまたく
まさろぶまいもまを
ろびるふかろつけて
たりりよろんりまふ
まろろとるまたひとろ
りそるまろろかろくとつ
さんやーとせーつぎのま
まぞはまてのりまを
なすびるぎけあるてろぎー
ようまきぶめーきのふけふあろ
つきのあめのろもりりのくさと
のまりけれりひそろふえりまや
ふろらるいさるおてりひとよぐ
さまおねぶりぎとまあうまを
んとつぶるもろれーくさーりとそ
めいまをとてのくひるのりりとりさん
せもたのーのまるーーぶろづきのろく
いとりりひそるまるまりまろふこよ
このまるいまるふかこのくまろる
右へ
柏
三



新刻校正 御江戸昌平町鑑 朱字細註横本 全二冊出版
半紙摺薄用摺

嘉永三年新彫

教訓浮世めゞ袋 全三冊 万亭應賀作 溪齋英泉画

兩筋戀ぢ山道 全二冊 万亭應賀作 一勇齋國芳画

勧善懲悪 栄合噺 七編八編 柳下亭種員作 一陽齋豊國画

刊行書肆 東都 錦林堂

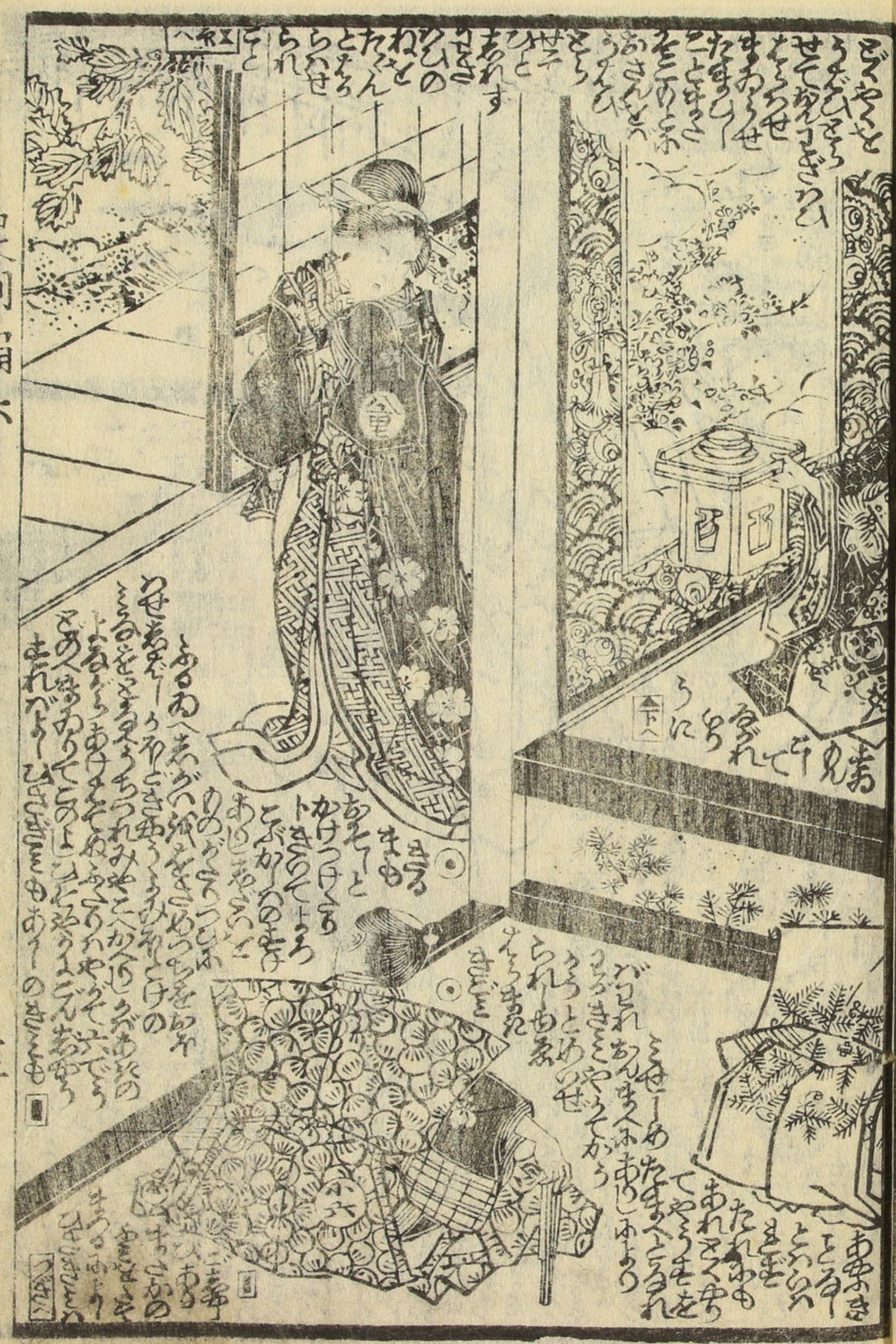
庚戌新刻
豊国画
六編下

庚戌
孟陬
吉辰
開市

仙果作

豊国画

神田錦林堂壽梁



茶道某

ふぢ酒

「つるき」ちんるもあんうとくさくうつ
ぶがかこうもめを
つけれみあくう
あるこい

◆うあく
よろさう

まうどうあき
れとやどこうどまうく
まわりてやめ

◆いつこあ
きるこころるす
このどつまぎ

まうせーあきあのこさ
せそこぶやしふるきんこうそ
さぐあられーがつぎみちていと
うつてんもんるぎこたんぎあう
ありてのちうあのこれちぐ
ちこじてきとこのこうこいとうり
いこだいーこうぎりこうこちぎこの
ちんのきめこのこいろいぶせたこあるく
ここてうれまうせぬこさこさこつぶ
ごまうるかめこあちるこいこぐ
まうこきこのるきけいこのこのあこりめ
ありこのめこうりつやまここうりてここまか
かしこいるんうけたやらんうこ迫まぐこいくのよ
ちきこんことうるぎりのこふたぐんこきうこの
うくふひきこてぐむうのここさ人あれゆこうきこ
まぐこきこのこいめきここいよくうぐれれあり
めこうるこうむこいもめこあうこてここう十五ふるう
たまうれえうぐーきこしうこもうるきふロれさく
蔓ーしーしやまごりうあこらふいたぶ

仙果作　豊國画

嘉永三年庚戌春新版

其由縁前面影改題
足利紡手染

柳亭種彦翁門人
笠亭仙果作
一陽齋豊國画

六編七編　八編　當戌年夷出板

諸藝御目見雙六　万亭應賀作　歌川豊國画

染模様仕立雙六　同作　同画

雅源氏東國初旅　第四編　仙果作　国芳画

東海堂梓行

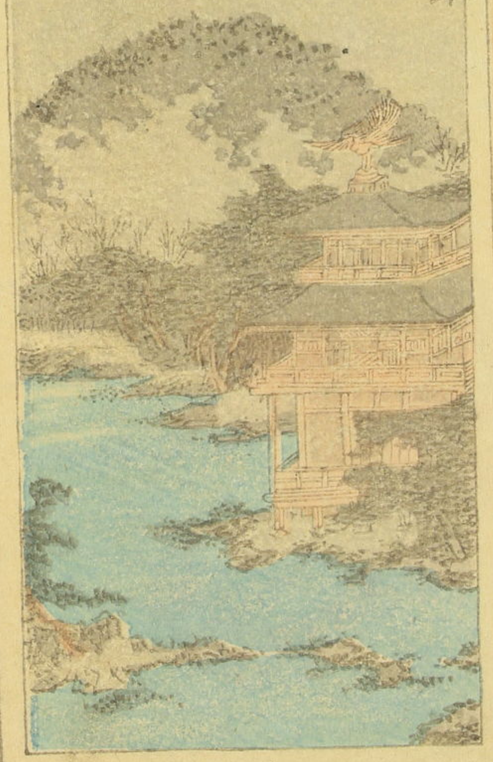
錦林堂敬白

版元　神田鍛冶町二丁目　太田屋佐吉

是利絹子樂茅舎主人之巻作者
笠亭仙果畫之一陽斎豊國筆
慶応戊辰

太田錦林堂蔵版

金閣寺井泉
君圖



相替らぬ夏と但出度夏の嫌ひとつゐるけれども祝の欲よりも懐ろ面白く三切ふ泣てこそ義大夫も身ふまむられ善人計で筋ひたぎ折角甜い醴ふ生姜をとられて雅ろとも紫史ふ古来の物語の中にもとも穏也人を殺さぎ金ふ逼らぎ惨いめをとる夏ふ一それで無量のおのりろこのあるのいろく佳作られど卑俗ふ訳して愚文ふ綴まび濃むしくふの色い抜地合のあるく手染の不器用鳶色ふさえ似もつるも先師も既ふ工夫を凝一本文ふ相替る丸心の曲者寶の紛失小鳥ろどふ目を覚さ朝顔ふお花ふたて結むの目浮せ紙紫船ろぐきの茶利場もとく長屋男の目ふ灰ぐたりて一度い白黒くせ一ふ又眠ふさ春の雨梅枝の薫物合藤末葉のぬるて若菜ろとろ和る処ぐ美味とふ計てふ煮てふ者ふもからぎろてふこと歌ふ考へ泉ふ前司を女ふて葛葉ろど化ふふ[八編]入事ろてふ立られぬ我拙さいらふぞろけまど彼来山ぐ句ふあるりくとも雪つけてふ若菜麦つてとぐらぬ理屈を記して序とす

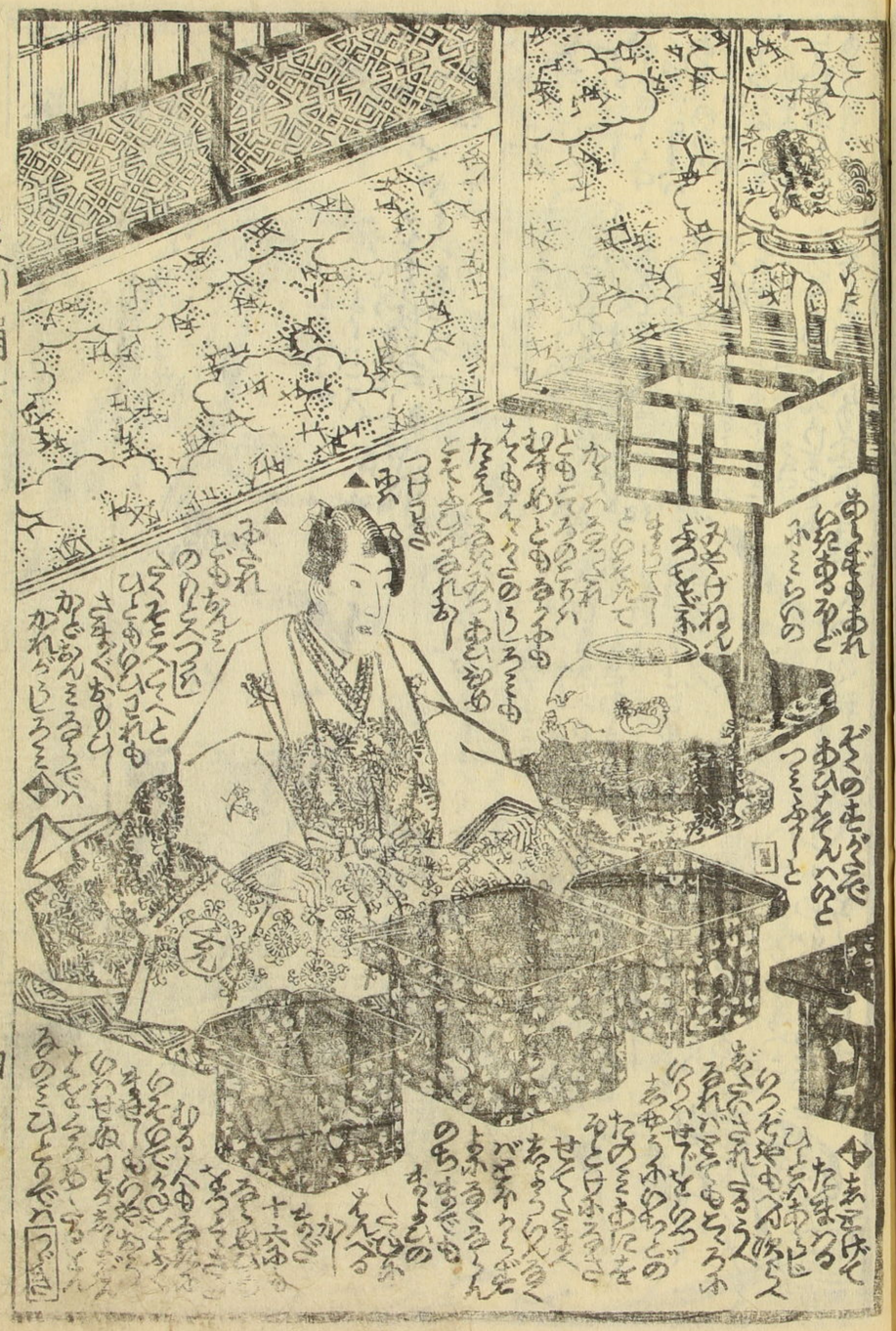
庚戌謹月

笠亭仙果

上若菜

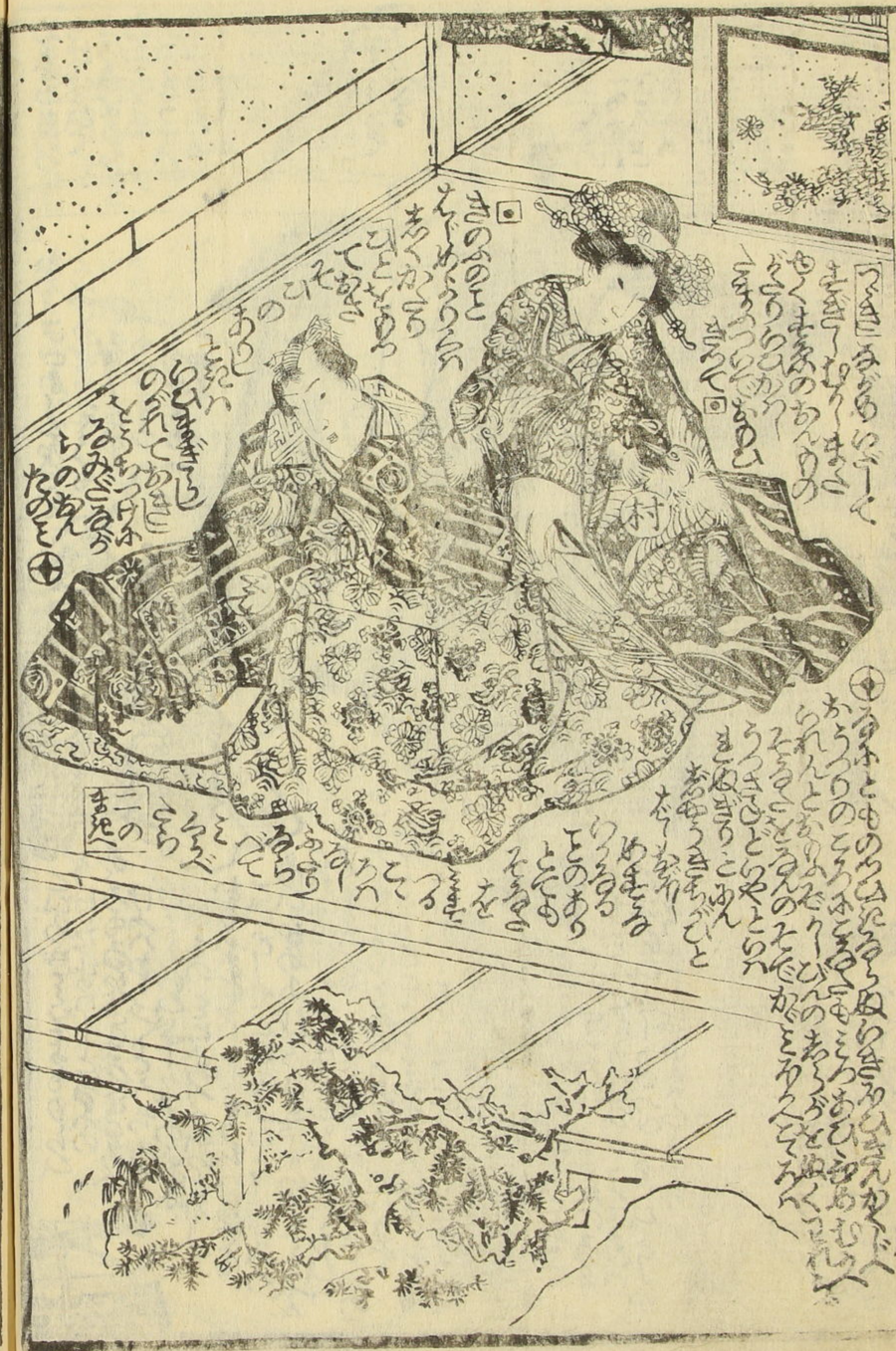
足利屋七

石堂馬之丞妻
桂樹が侍女
葛葉



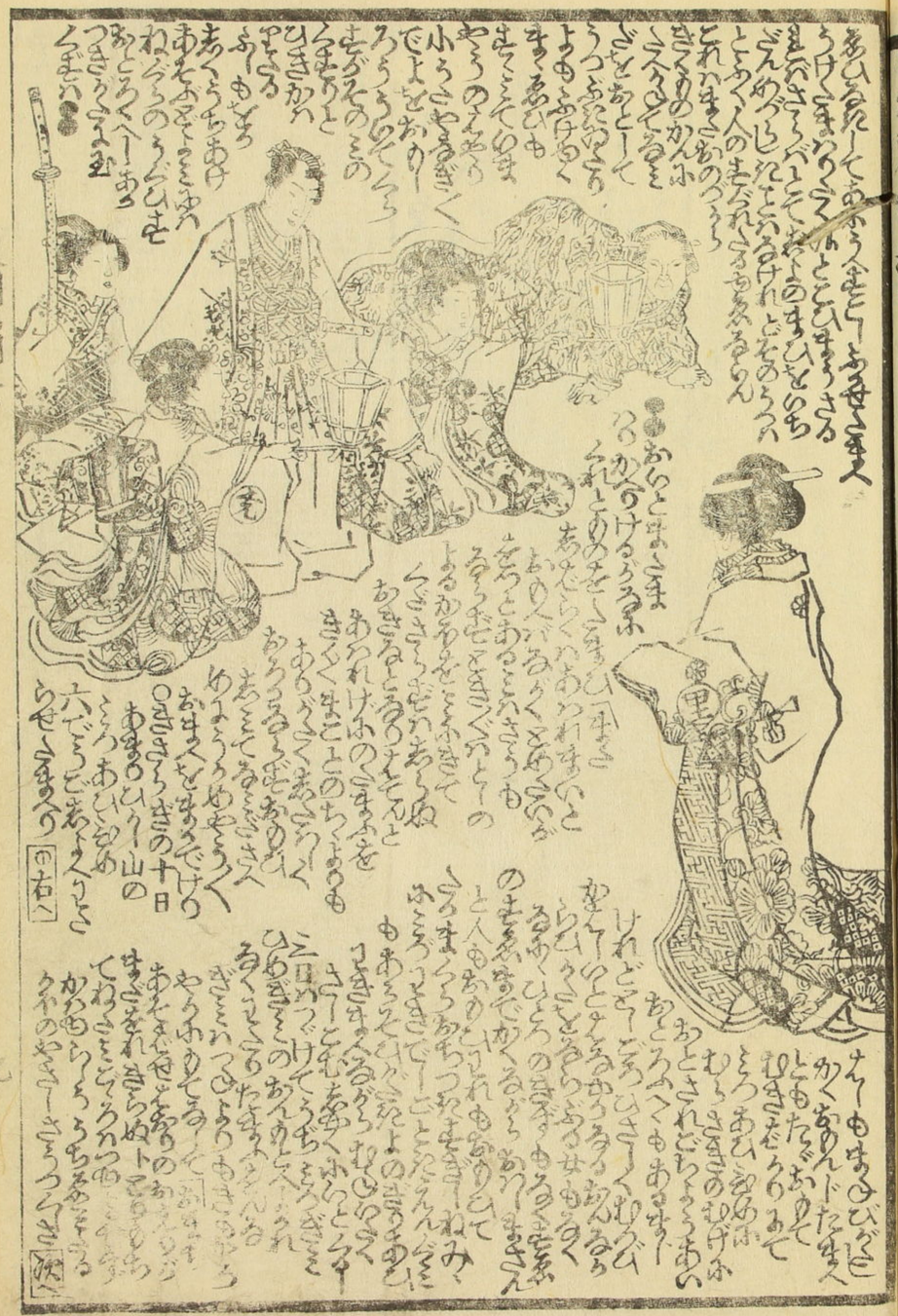
つゞき
このごろのあどきハへんかしらい

元

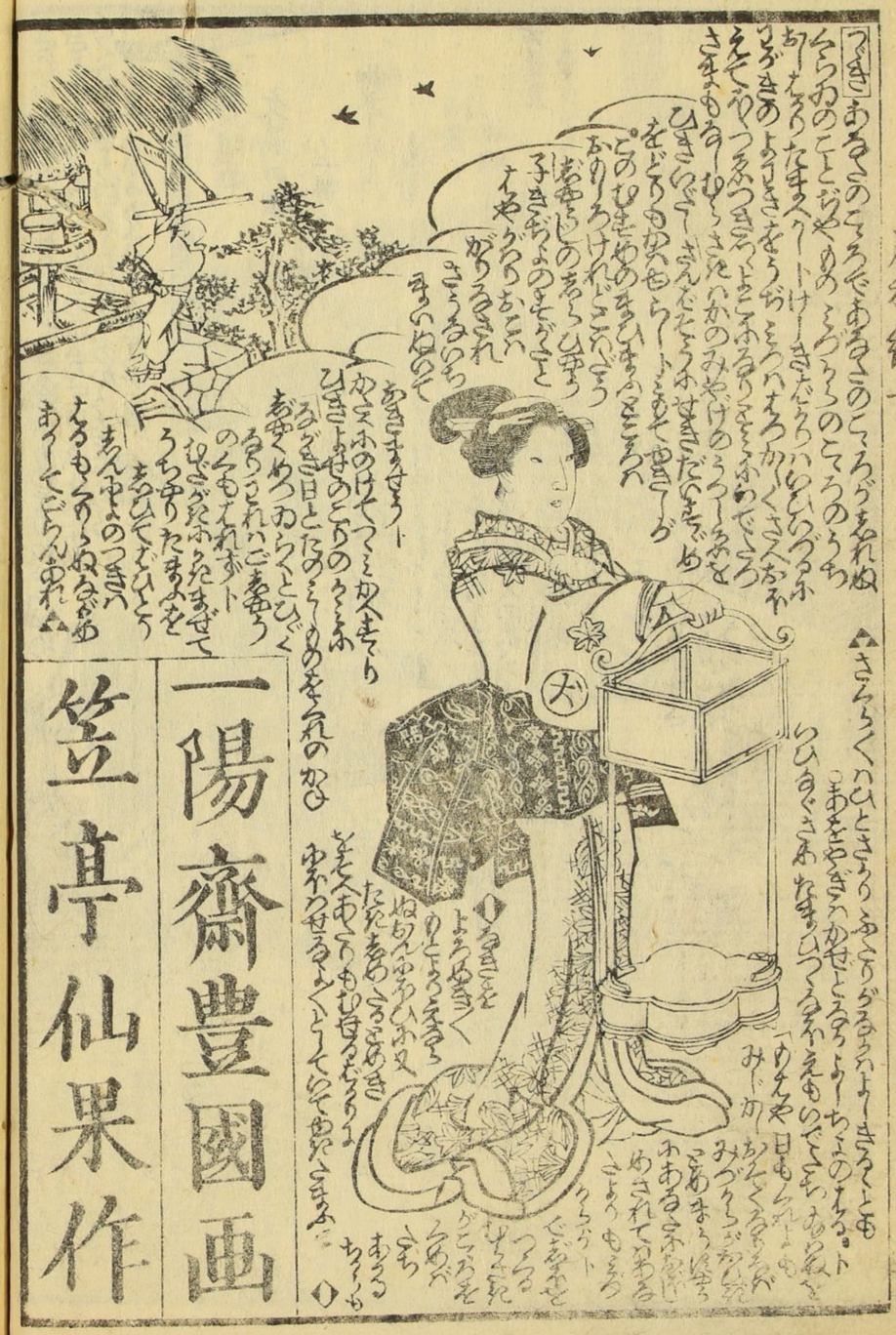


つくきこそとりけり
まこかぎて
のだいこそわり
らいさんとまた
多くをるる
かくまのつく
あるきこの
の山りつ
せてきん
のこぶとろ色
あるのいろの
きんぐをも
いろく
よ
四
柏
四年とろ
こうとけきんどこのとり
あのよくあくまちつき
てぐくのからまざろ
たのうろうきこる
やうまにてかどある
さまスかふまこ
たぐひもあじ
ちよのとる
こまろひたつれ
いのるうるト
らひつぢんの
そきふまを多る
ロろうのあるのめ
たてまろれいそと
あんちーとたて
さまられまくさろ
づきをとろあげて
こまろうゆや
ひろれて
つまんの
のく
こうる
ことと
よの
まつけの
ぐふ
いぐまち
ひとくさはさろ
づきこまくぶたま
くまふまんぐりて
ゆきろふまけいきぶて
おーがまあらぬいちゆうろと

まろあろうどくれが
ちうけのぐさんぐ
たまふとてまろあん
うらあておくぐふ
ひきぐゆてろいめん
わろがのとろとろふとさらく
ゆけるぐとくとせらあんのまと
のちろるんのさまあかろてくくえ
ぎつやくとふそりくこ十九に十
ゐとかぐくらひまあろぎゃ
ふとかのれろくんとそそひくくたて
まろぐ王ぐまかくぐやくふけまた
たらんさぐやくゆつごらんぎらんと
のともくんろうけれどのまぢ
まんたーゆもれでちろく
ようてけのどあのあぎまくるふくれと
りのぐろうけこまろきとえつくとろと
のさーゴふこれのもこまろりけれぐさて
つぎれうくくあてろんのこまるろりやと
こうのんとひきうれてこのろのでれあのくくえと
とれんぐらぢころきこのろまぐのもこまるえろ
まとりろくとゆかかられごとのやろれふとひける
こきものふしくできたんとれでやいうまてろうこと
やろまろ・ろのまくろうまたくさんされと
ぐまきこそろのくくそのまのもけのとろ
をろいまとまくふくまとそとろれで
まーろうのまろまろたくくさそこ
ちとつろートたれのてふまくく
まくべまこぎのもまーろう
あぎゆふかぎろうとろ
ムンぢうのさぐふを
うぐひまの
のまをふぬふうの
さえあいかるやと
ろあろうこまろ
せーろうべー
ひとぐ
あんくきこてせきまくつきたろひく山の
ゆぐまこどのるふくくまてちのまぐれ
わのそれふまでろのろいのく
ぢきのやくーやものーまろぐき
ひられてのちあつまりふとくふ
まやまきこいまちのろくくのの
多のかんまとまんのーろ光りめく
このあんかとまんのーろ光りめく
れをものつきまんとあのまろ
たろまくくんとまろいまろ
たろふまんぐまこぐまろれど
みろてまろ
ぐまんぐきろ
あどまろ
ねのつぐこ
ゆかあ
あろて



古画入隨筆
文箱の紐
二冊
柳亭先生
遺案
仙果
補級
右未夏
賣出申ス



一陽齋豊國画
笠亭仙果作

新刻
校正
御江戸昌平町鑑
朱字細註横本
半紙摺薄用摺
全二冊出版

嘉永三年新彫

教訓浮世めぐり物語　全三冊　万亭應賀作　溪齋英泉画

兩筋戀ゝ山道　全二冊　万亭應賀作　一勇齋國芳画

勧善懲悪　粟合噺　七編八編　柳下亭種員作　一陽齋豊國画

刊行書肆　東都　錦林堂

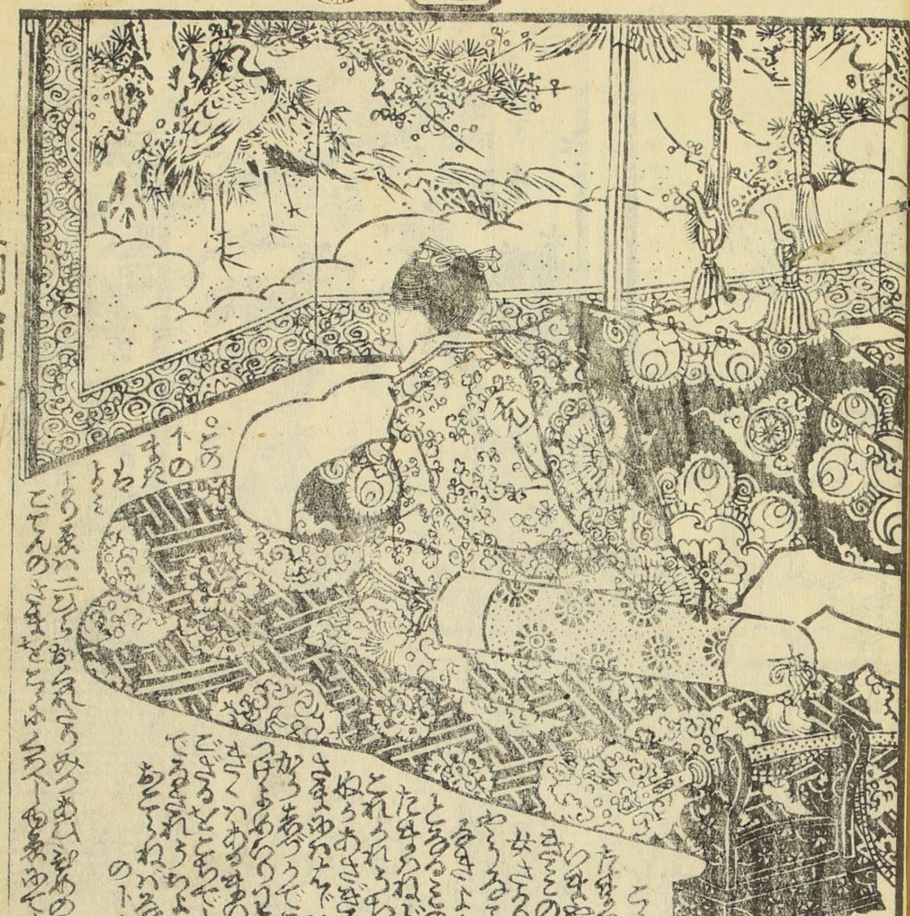
七福神下

手染ひなの長

七編 下

仙果作
豊国画

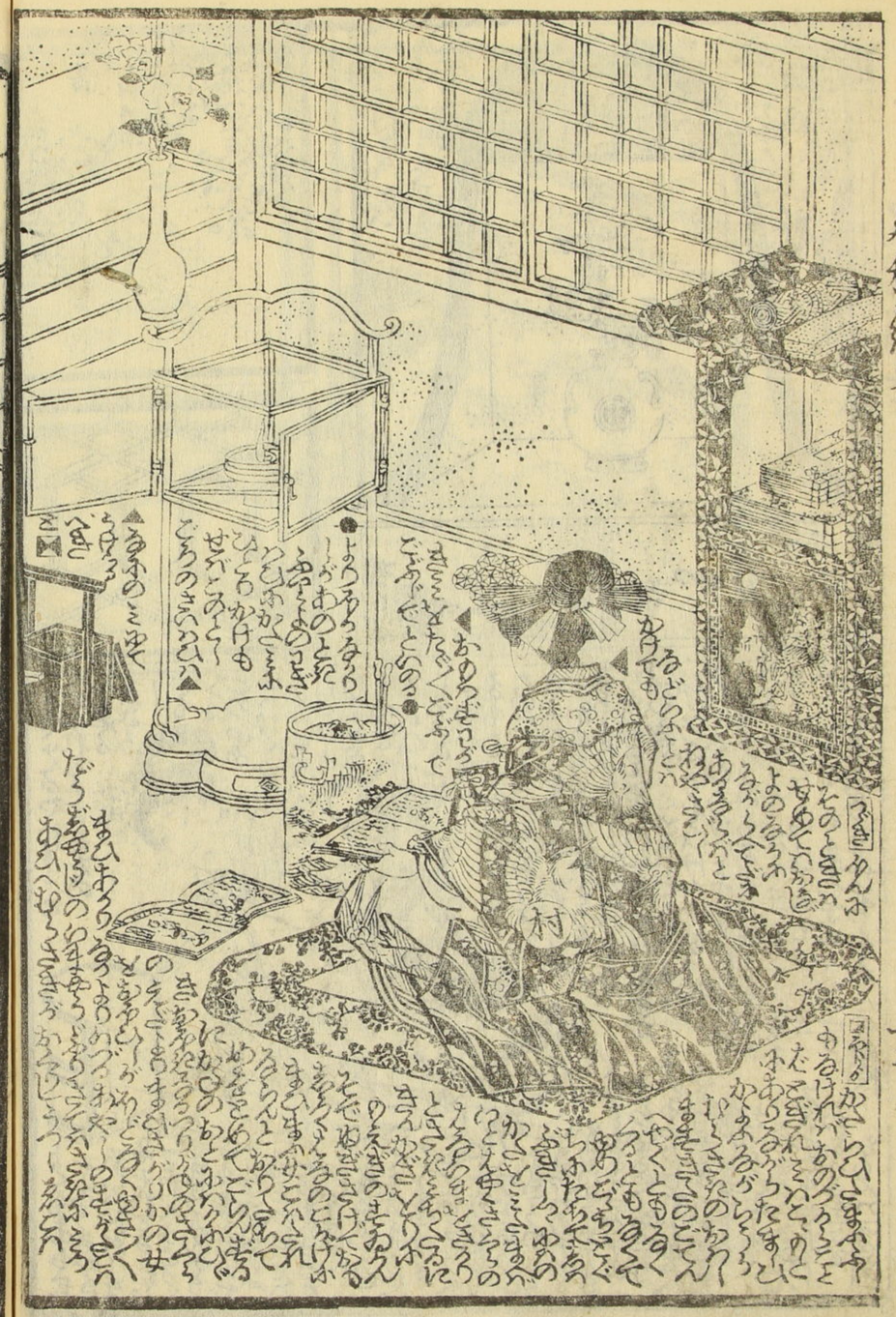
太田屋版

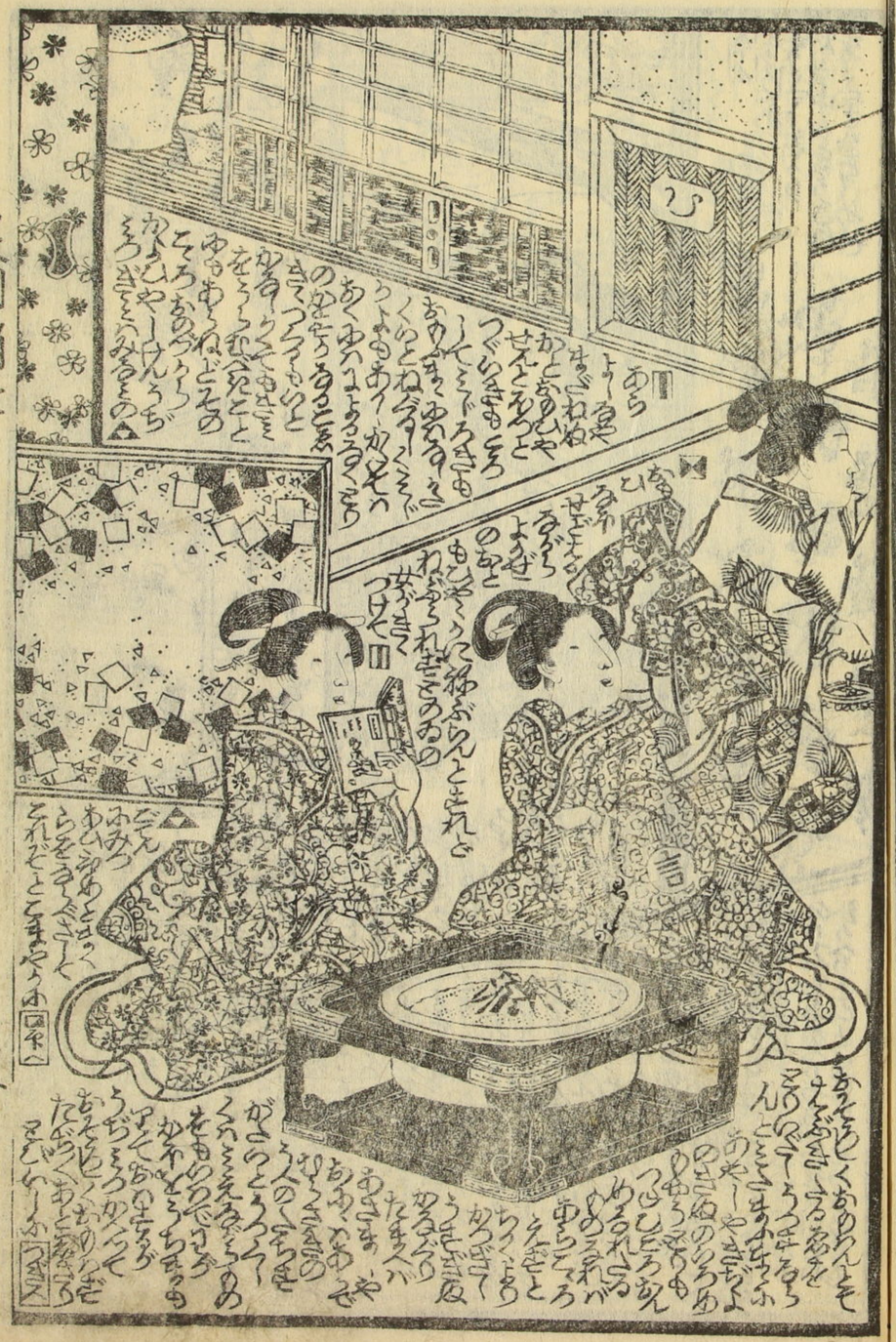


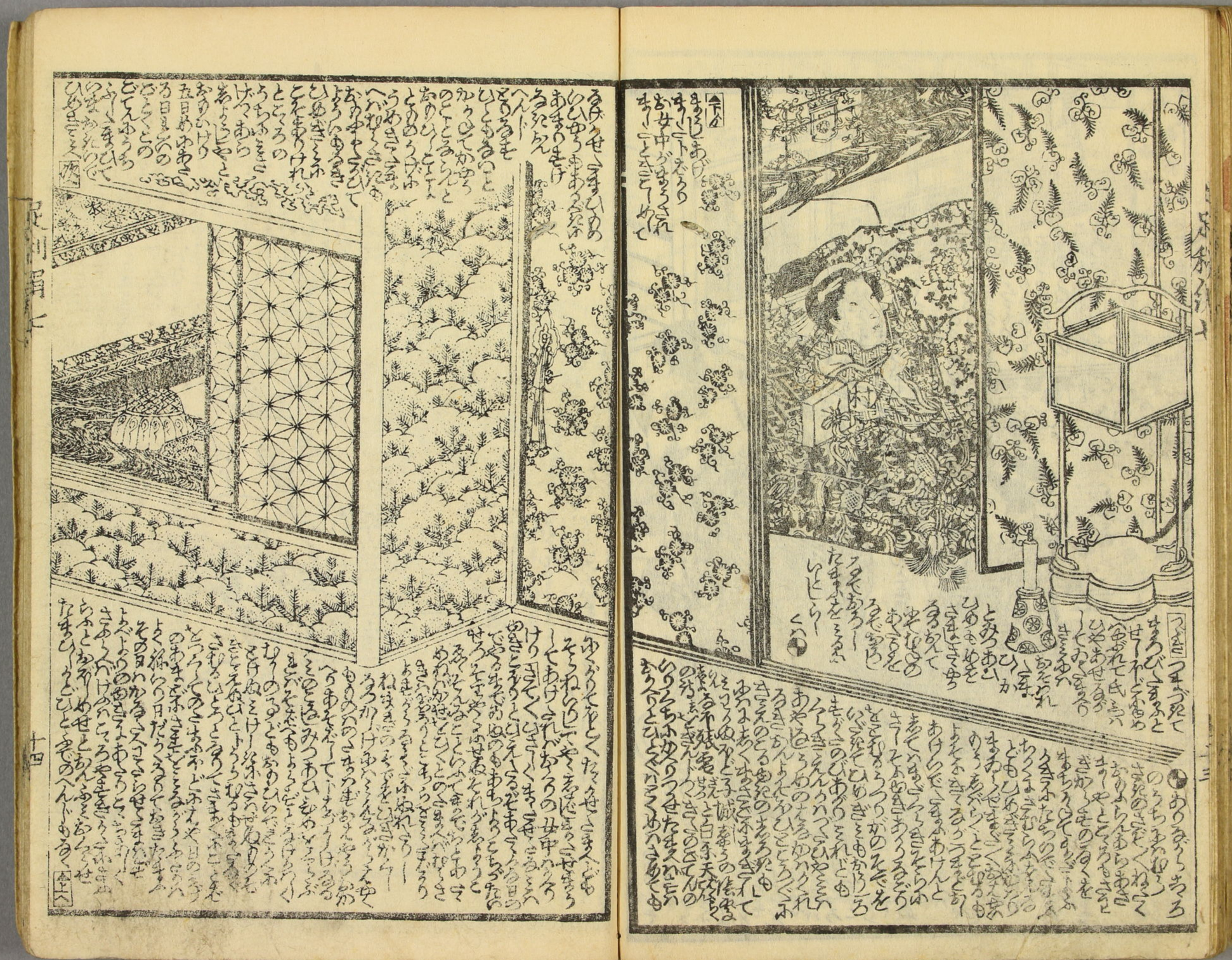
二のまき

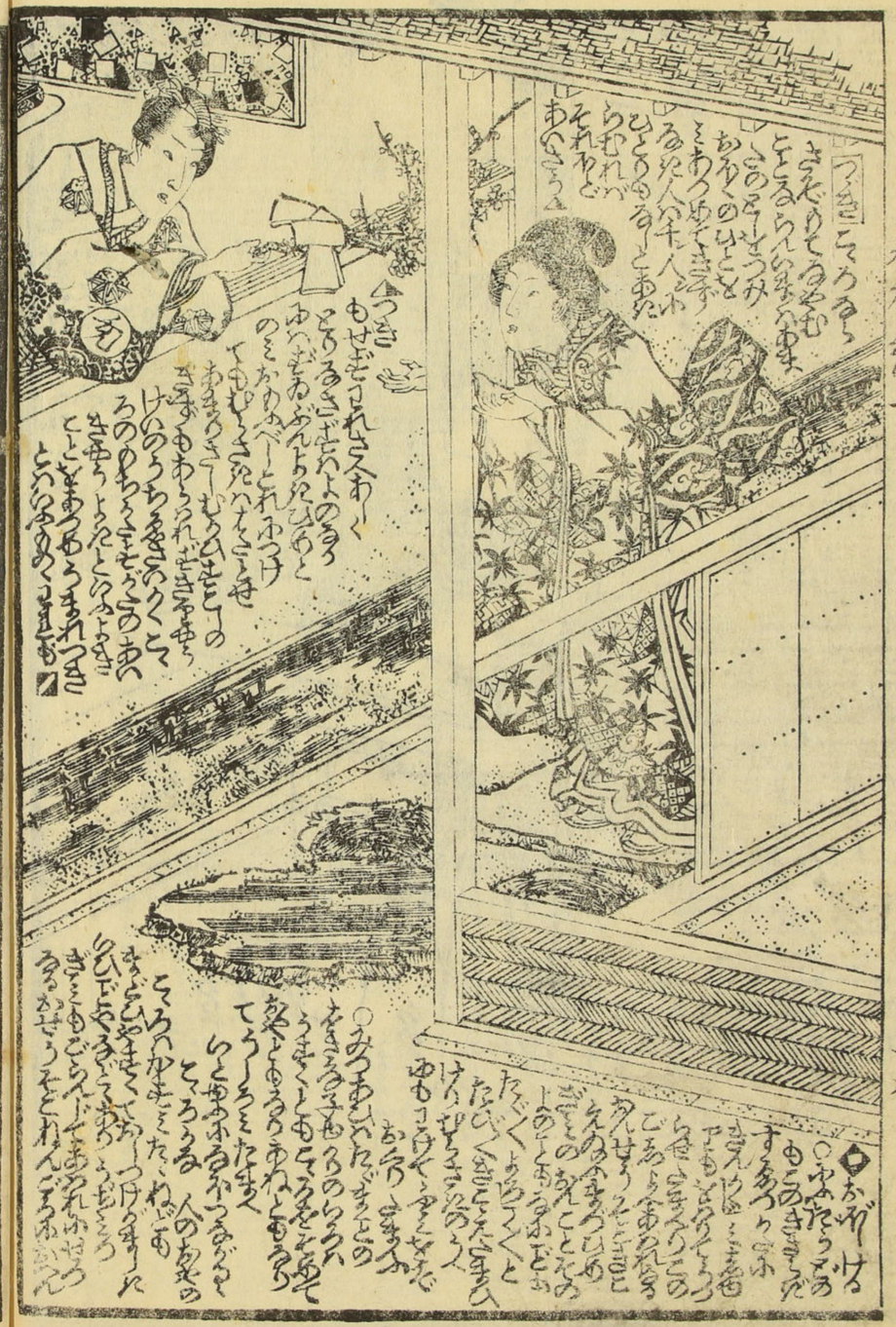
おひろまぞさ
おろさないでおく
みがめこ
あまこの人をこ
あるひいわんをあらわ
てそそきこれたろのせんさくと
おりうてさえもねこまーくいま
ゆこまそてさまうんうとゆそ
ころもるうろ
いみやろくいあちつきて
きこのあるさけかくてこそ
女さろもさくまづーいるふこと
やうるこのばーいるふこと
とろるこのとてそやとおりしつくらろゆあ
たまろねこなこ
これられちちろて
ぬらあさころさまでもうさ
さまゆれんでめくらかるうぬこと
かろあうそこともそころくんとの
つけよめりりきこあきこのとろれいさうあ
ござるとこもでもあよーとうるいでるのまけそ
でるきれうちよとあこことろやきるりめう
あとくれいるうぬりきゆしりやることでるくい
のトさうやるけくをのこてふかこ
きてもあくまぐいちくあ
女中らふりのくれもまこ
まこまさよもやまの

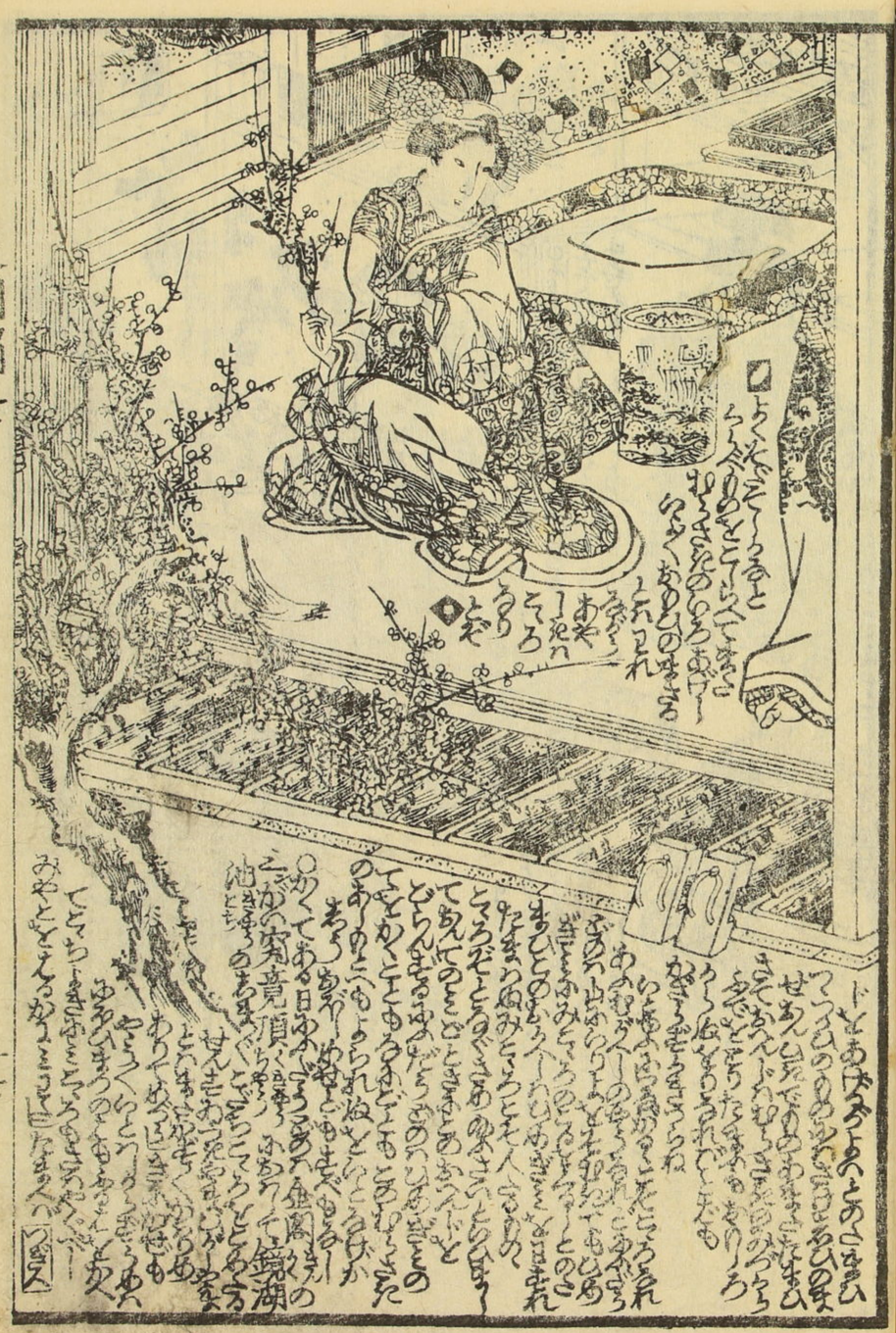
つゞき











豐國画 仙果作

浄書 谷金川

嘉永三年庚戌春新版

其由縁 柳亭種彦翁門人 笠亭仙果作
一陽齋豐國画

足利紙手深草

六編 七編 八編 當戌年美出板

諸藝御目見雙六 万亭應賀作 歌川豐國画

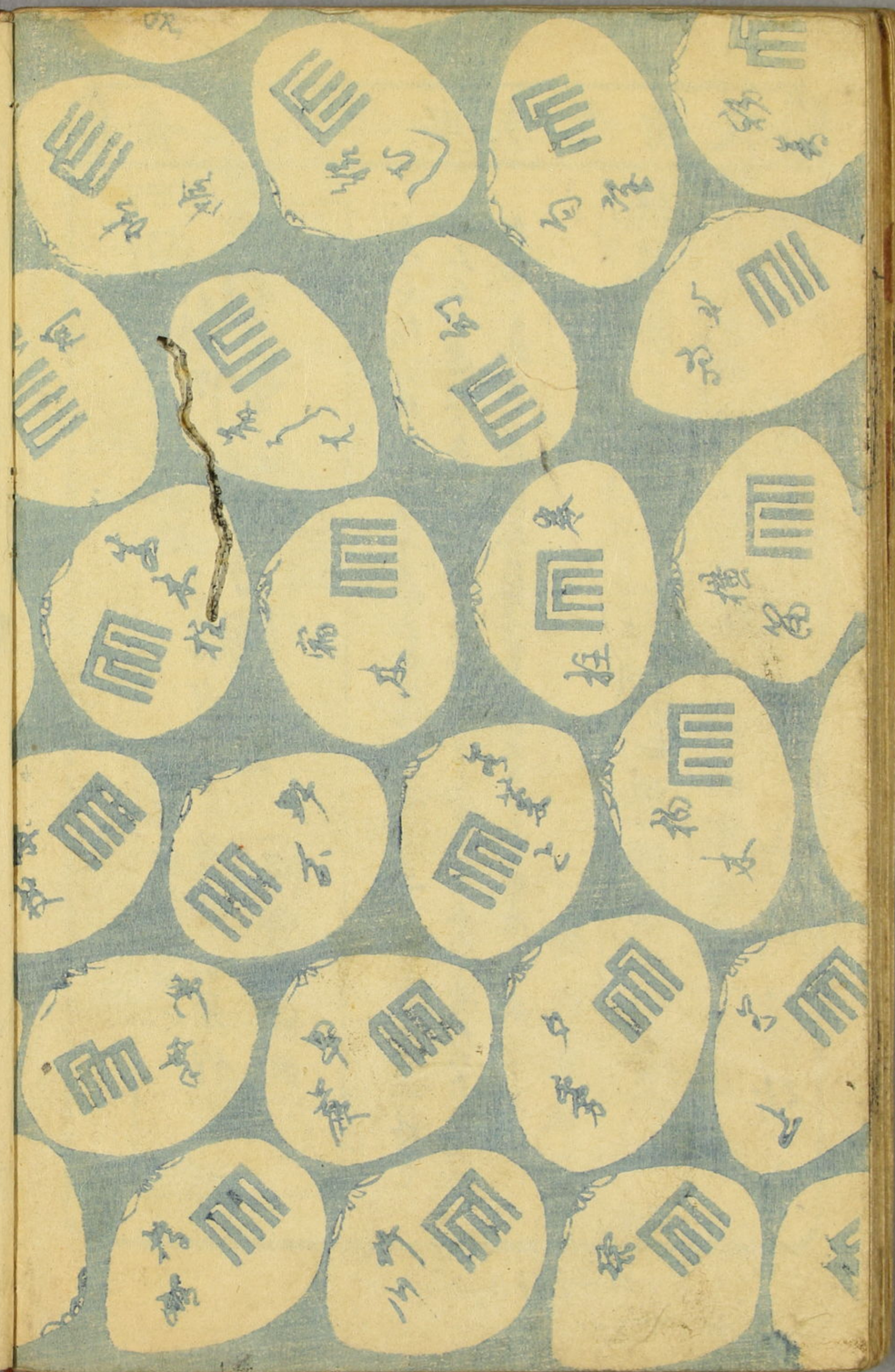
雅源氏東國初旅 第四編 仙果作 国芳画

錦林堂敬白

東海堂梓行

版元 神田鍛冶町二丁目 太田屋佐吉

深模様仕立雙六 同作 同画



口演

○ゆうりの物がたりうきよ八せいこきゝ　たゞこゝ六ゝ五手とあるこゝろ十四

此さうしハ其由縁鄙俚の錆悔多きを作者仙果故柳亭翁よ聞置し節小源き改正たる丹誠の著述ハ小して初編ゟ十四五編を稿本出来いたし居ゑ一時小八手廻ら私先其由縁五編目ゟ續く巻より六七編と賣出申ゆゑ外題八改まとも鄙俚の續つきハてさらよ新奇の趣向八百倍是約ゑ田舎染の根元ゆゑよ欲近頃八二世紫の似寄のさう〜かゝ〜ゑれバ此上ハもそのゆゑ〜と申ゑ何方ゟ出ゑとも實の紫八此手染外くの世間見比足利絹の染様八師匠の口授ゟ水際ゟ立てゐると御評判ゟ益澤山御求御覽の程奉希上ハ擂八編ゟハたゝ秋冬ゟ歌ゟ雪ゟ淡雪ゟ出ゟ

板元謹言

淺野氏

柳亭好彦翁門人
仙果作
門人国麦画
錦林堂